

## 外国語科（英語） 基調提案

### 探究的なプロセスによる知識・技能の習得

－「探究」を内包した「習得と活用」－

#### 英語科の2つの役割

本校の教育課程の中で、英語科に課せられている役割は大きく2つに分けて考えることができる。1つは、スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）事業における「国際性の育成」に寄与することである。科学研究においては英語が国際共通語として使われていることから、主に課題研究について英語で発表したり、やり取りしたりすることができる力を育てることを、英語科の任務として請け負っている。これは、English for Specific Purposes (ESP) と定義づけることができる。これに対してもう1つは、English for General Purposes (EGP) と定義づけられる、4技能5領域の英語力を育てることである。これはSSHであるか否かに関わらず英語科が担うべき任務である。もちろん、育てるべき生徒が同じである以上、これら2つは常に截然と分けられるものではない。むしろ、2つの極ととらえ、その間のグラデーションのどこかに個々の指導の局面が位置する、と捉えるべきである。

#### 教科固有性

さて、これら2つの極を、教科固有性、つまり、本質的に英語科が担うべき、あるいは英語科でなければ担えない役割であるか、という観点から考えてみる。

すると、ESPの極は、英語を使用しての科学研究活動という点では英語科に深く関わるのであるが、科学的な内容についての発表ややり取りの技能については、必ずしも英語科に固有の教育内容であるとは言えない。また、そういった科学研究活動を支える思考力については、なおさら幅広い教科・科目を通じて育成されるものであり、英語科としての固有性は低い。（もちろん、どのような内容であれ、それを「英語を通じて」経験することの意義はある。）このように考えると、本校教育課程が目指す探究的な学び、そして、その極致である課題研究への取り組みにおいて、英語科の果たすべき任務は、英語そのものの指導ではなく、英語が使用言語となる局面での支援という奉仕的な性質のものであると言える。

一方、4技能5領域の力を育てるEGPの極は、まさに英語科固有の本来的任務である。教材内容に他教科の知識・理解が関わってくることはあるが、英語科の本来的な教科内容ではない。

#### Form-Meaning-Use

ただし、上述のように、この2極は明確に分離されるものではなく、その間にグラデーションのある連続体（continuum）を成していると考えられるべきものである。また、「本来的」「奉仕的」という用語は、一方を主、他方を従とする序列や軽重を暗示するかもしれないが、そのようなことはなく、いずれも等しく英語科として請け負うべき任務である。



図1. 本来的任務と奉仕的任務の連続体

では、本来的任務のEGPという極から出発した場合、その教育作用は、どのようにして奉仕的任務のESPへと結びついていくのであろうか。1つの考え方として、英語科の指導内容をFORM, MEANING,

USE という3つの要素に分けてとらえてみる。そうすると、FORM と MEANING の対応関係 (FORM-MEANING Mapping) は英語という言語そのものの性質であり、これをターゲットとする学習は、まさに英語科が専門的に扱うべきものである。

これに対して、USE の指導でターゲットとなるのは、何らかの課題を解決するためのツールとしての英語の使い方である。課題の性質によって、英語そのものの学習に重点が置かれる場合もあるが、一方で、英語そのものは背景に退き、伝達すべき内容や非言語的メッセージの扱い方が前景化してくる場合もある。そのように考えると、上述の連続体において英語科固有の任務から奉仕的な任務へと、その濃淡が変化していくのは、この USE の指導においてであると言えよう。

### 習得・活用・探究

では、今次の研究開発課題である「探究」は、この連続体においてどのように位置づくのであろうか。これが、英語科にとっては単純な問いではない。上で整理したように、FORM-MEANING Mapping を端緒とする英語科の本来的任務から USE により重きを置く奉仕的任務への移行は、視点を変えれば習得から活用への移行ととらえることができる。英語という言語について基礎的・基本的な知識・技能を身につけ、それをツールとして実際的な課題を解決するというのは、まさに「習得と活用」の図式である。上の連続体は、「習得」と「活用」という概念で説明を尽くすことができるのである。

であるならば、英語科における「探究」とは何か。考え方は2通りある。「探究」をゴールとして捉える考え方と、プロセスとして捉える考え方である。

表1. ゴールとしての「探究」とプロセスとしての「探究」

ゴールとしての「探究」	プロセスとしての「探究」
習得 → 活用 → 探究	<div style="text-align: center;">           習得 → 活用            └──────────┘            探究         </div>

「探究」をゴールとして捉えるとは、「活用」のさらに発展したもの、あるいは「活用」よりも上位の学習活動として「探究」を設定するということである。課題研究はまさにそのような「探究」に該当する。英語科では、たとえば、科学研究活動における英語を通じた情報収集や情報整理、他の研究者との討論など、英語をツールとした活動を高度化させることが考えられる。視点を変えれば、USE の指導の高度化であり、図1の連続体の右端をさらに延伸しようとするのが「探究」ということになる。

一方で、「探究」をプロセスとして捉えるとは、習得および活用の学習過程そのものを「探究的」な性質のものにするということである。たとえば「習得」の局面で、学習のターゲットは英語そのものであるような学習活動において、機械的訓練による習慣形成に留まることなく、FORM-MEANING Mapping を試行錯誤しながら能動的に構築していくような学習のあり方が考えられる。

特に今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、結果だけでなく過程においても「個人において成立する学習」の追究を余儀なくされている。今回の教育研究大会においては、そういった「個別化された学習」「個別化できる学習」という観点も含めて、「プロセスとしての探究」を実際の授業へと具現化することを試みる。